

平成25年度 日本庭園学会 関西大会

---

シンポジウム

「京都市内の町家・民家の庭の調査」

研究発表会

---

資料集

平成25年11月9日(土)

龍谷大学 大宮学舎

日本庭園学会

## 目 次

### 研 究 発 表 会

1. 須磨地方に於ける近代庭園の遺構について(12:30-13:00)..... 2  
西桂(兵庫県立淡路景観園芸学校非常勤講師)
2. 近代福岡における煎茶趣味の流行と庭園への影響(13:00-13:30).....10  
正田実知彦(福岡県教育庁総務部文化財保護課)
3. 旧吉田茂邸庭園について(13:30-14:00).....18  
白井充(神奈川県庁)
4. 對龍山莊庭園 百年後のための庭園管理計画-I 百年の変遷をたどる..... 24  
(14:00-14:30)  
加藤武史・小山由美・加藤友規(植彌加藤造園株式会社)
5. 桂の月 桂離宮庭園の方位、池の月、使い方(14:30-15:00)..... 32  
鈴木 薊(鈴木薊建築事務所)
6. 福井県の三田村氏庭園の特色について(15:00-15:30)..... 40  
藤田若菜(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)
7. 内山永久寺庭園の庭園形式について(15:30-16:00)..... 46  
菅沼孝一(京都産業大学 日本文化研究所)
8. 経営戦略論としての作庭記(16:00-16:30)..... 52  
森 泰規(株式会社 博報堂 コンサルティング局)
9. 名勝無鄰庵庭園の緊急修理の履歴からみた保存管理の継続性(16:30-17:00)....58  
阪上富男・加藤友規(植彌加藤造園)、吉村龍二(環境 事業計画研究所)、  
仲隆裕(京都造形芸術大学)、今江秀史(京都市文化財保護課)
10. <には>の語義にみる<庭>の本性(17:00-17:30)..... 64  
今江秀史

### シンポジウム「京都市内の町家・民家の庭の調査」

#### 話題提供 資料

1. 主旨 今江秀史(京都市文化財保護課)..... i
  2. 町家・民家の庭の現地調査手法 村上真美(京都府文化財保護課)・木下紘子... vii
  3. 生活と住まいの相互関係 今江秀史..... x
  4. 町家・民家の庭の形態と配置 仲隆裕(京都造形芸術大学)..... x vi
- 現地検討会 資料..... iii i

---

## 對龍山莊庭園 100 年後を見据えた庭園管理計画

### - I 百年の変遷をたどる -

A Garden Maintenance in Anticipation of the Next Hundred years.

- I A Hundred Years of Transition the Garden has Experienced -

加藤武史 小山由美 加藤友規

Takeshi Kato, Yumi Koyama, Tomoki Kato

植彌加藤造園株式会社

Ueyakato Landscape Co., Ltd

Key Words : (邦文) 1. 伊集院兼常 2. 市田弥一郎 3. 小川治兵衛 4. 名勝庭園  
(欧文) 1. Kanetsune Ijuin 2. Yaichiro Ichida 3. Jihei Ogawa 4. Scenic Garden

---

#### 1. はじめに - 對龍山莊庭園の概要 -

對龍山莊庭園は江戸時代の旧南禅寺境内に位置し、塔頭である金地院の敷地であった場所に築造されている。明治 29 年から 32 年まで伊集院兼常の別荘であり、その後、清水吉次郎を経て、市田弥一郎が譲り受け明治 34 年から 38 年にかけて改修が行われた。作庭は七代目小川治兵衛（植治）、建築は島田藤吉（島藤）によるものである。名前は改修後に瑞龍山に對（対）していることから谷鉄臣により命名された。建築と庭園が一体となり、對龍台からは東山を借景とした雄大な景色が、聚遠亭からは深い庇により凝縮された落ち着いた景色が広がる。昭和 63 年には国の名勝に指定され、文化財としての価値が高く評価されている。

#### 2. 研究の背景と目的

これまで對龍山莊庭園においては、伊集院時代と改修後の比較、空間構成や流れと石のデザイン、音環境にいたるまで尾崎博正、仲隆裕、曾和治好をはじめ、数々の研究者により調査がおこなわれてきた。<sup>1) 2) 3)</sup>しかし、伊集院による築造から現在までの對龍山莊庭園の細部にわたるまでの変遷の様子が明らかにされているわけではない。また、非公開となっていることから現在の姿を目にする機会は少ない。

私の職場では今年の 3 月より對龍山莊庭園の維持管理を受託することとなった。今後の維持管理方針を考察していく上で、庭園内や周辺環境の景観の変化を把握する

ことは、對龍山莊庭園の本質的価値を見出すことであり、きわめて重要であると考え。そこで伊集院の築造から百年以上が経過した今日において、古写真や書籍による検証から改めて對龍山莊庭園の変遷をたどるとともに、現在に至るまでの変化を明らかにし、現場で維持管理を行っている庭師の目線から過去と現在の庭園内の景観を比較することで、現在の課題、そして百年後のあるべき姿を見出し、維持管理方針を考察することを目的とする。

#### 3. 對龍山莊庭園の歴史的変遷

伊集院による築造から市田弥一郎による改修、そして現在までの對龍山莊庭園の変遷を 3 つの時代に区分し比較検証を行う。

伊集院による築造から清水吉次郎が所有していた第 1 期（明治 29 年～34 年）、市田弥一郎による改修から名勝指定前の第 2 期（明治 34 年～昭和 63 年 12 月）、昭和 63 年 12 月 24 日の名勝指定後から現在までの第 3 期である。

第 1 期（改修前）と第 2 期（改修後）では庭園内の地割や水系などについて改修前と改修後の比較を行い、図や写真を用いて差異を明確にする。

第 2 期と第 3 期については、庭園内の樹木・石組・水系などの庭園要素と周辺環境の変化をたどり、現在の景観に至るまでの経緯を把握する。

(1) 第 1 期（改修前）と第 2 期（改修後）の比較

第 1 期と第 2 期を比較する上で重要になるのが黒田天外



による来荘記事と、對龍山莊内に所蔵されている古写真である。

黒田天外は明治時代から大正時代に活躍した美術評論専門のジャーナリストである。黒田は對龍山莊庭園の来荘記事を二つ執筆している。一つ目は明治34年に発刊された『江湖快心録』<sup>4)</sup>、二つ目は明治45年に発刊された『日本-美術と工芸』第4号の「新名園記(二)」<sup>5)</sup>である。『江湖快心録』には伊集院時代の庭園内の様子が、「新名園記(二)」には改修後の庭園内の様子が記されている。

改修前の古写真は台紙つきで裏に「對龍山莊舊庭園ノ図 六葉ノ内」と書かれ、表には谷鉄臣が對龍山莊庭園の様子を詠んだ「對龍山莊十二景詩」のうちの6景になぞらえて題がつけられたものが6枚、および前者と同様の裏書があり、「Y. Ogawa」のサインがあるものが5枚である。「Y. Ogawa」とは植治の長男である小川保太郎（白楊）であり、改修前に白楊が撮影したものと考えられる。白楊は改修後の庭園内も撮影しており、台紙に「小川白楊」の印が押された写真が20枚残っている。

ここで黒田の記事と古写真から改修前の庭園の様子を明らかにしていく。改修後も同様に黒田の再訪時の記事と古写真を用いて改修直後の様子を把握し、改修前との比較をおこなう。比較するにあたり庭園内を①改修前後で変化が大きいエリア、②改修前の景観がほぼそのまま残されたエリアの二つのエリアに分ける。(図2)

#### ①改修前後で変化が大きいエリア

①には、對龍台の築造や大池の改修、大滝などの庭園北側部分と南側の流れが含まれる。改修前、現在の對龍台がある場所には居住空間と思われる建物があり、建物の北東には池が広がっている。『江湖快心録』には庭園北側の様子が「遣水は一度井筒に湧き、再び樋を通じて池に注ぎ、淙然として聲あり。池はやゝ大にして中央に小島あり、雅致ある木梁之に通ず。池の彼方に蓮あり、花期は既に遅れたり。」と書かれており、写真Aからも、聚遠亭の東側を流れてきた水が石樋のようなものから池へ注がれている様子や、池の西側に蓮が密生している様子が見てとれる。また、改修前から池には中島があり、対岸から木橋がかけられていたことがわかる。改修後、蓮があった場所にはマツなどの樹木が植えられ、大池は

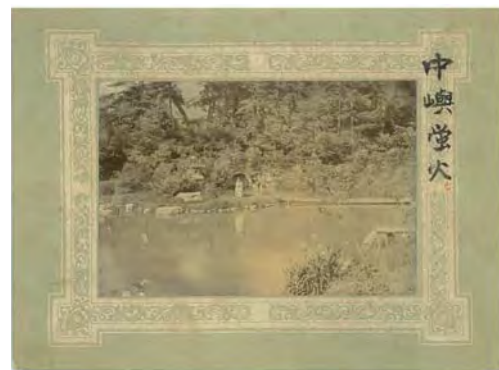
石組が施され、滝が作られた。改修後、再び對龍山莊を訪れた黒田は大池の様子を「池水は混濁として其中に一島を着く、樹影水に蘸し錦鱗いと多し。一步毎に光景一轉し、正面樹木翳蒼の處、巨大の瀑布鞆鞆として下り、殆んど玉龍の飛ぶが如く、一水は高閣の下に出て、渦いて飛湍となり喧騒して池中に注ぐ、其下亂石極めて多し。」と述べており、池に錦鯉がいる様子や豪快な滝の様子が述べられている。『江湖快心録』で黒田は庭園の奥行のなさを「惜しい哉」と述べている。改修の際、草や樹木が生い茂り鬱蒼としていた庭園の南側に流れと園路が作られたことにより奥行が加えられた。



写真A 改修前の大池（對龍山莊所蔵 小川白楊撮影）



写真B 改修後の對龍台（對龍山莊所蔵 小川白楊撮影）



写真C 改修前の中島（對龍山莊所蔵 小川白楊撮影）



写真D 改修後の中島・大滝（對龍山莊所蔵 小川白楊撮影）



写真F 改修後の聚遠亭と流れ蹲踞（對龍山莊所蔵）

## ②伊集院時代の景観がほぼそのまま残されたエリア

②のエリアには聚遠亭前の小滝から北側へと続く流れや流れ蹲踞、茶室周辺の露地空間が含まれる。『江湖快心録』には聚遠亭周辺の様子が「昂ち皮履を穿ち前庭に出れば、飛湍より流るゝ水は紆餘として前を流れ、細くして浅く、水中の白砂皆數ふべし。兼好が深き水はしげしげなし、浅くて流れたる遙にすべしといへるも思ひ合さる。されど遣水なれば、皆斯くあるべきにや。飛石を傳ひて北手に辿れば、遣水は一度井筒に湧き、…」と書かれており、伊集院時代から流れや、流れ蹲踞があったことが分かる。エリア②では、エリア①のような大きな変化は少ないものの、庭園細部の設えの変更が行われている。流れ蹲踞に使われている蹲踞が伊集院時代と改修後では異なるものが使用されている。さらに、茶室前の飛石が伊集院時代では聚遠亭まで続いているが、改修後は腰掛待合までで終わっている。聚遠亭前からの流れの護岸は伊集院時代からほぼ変わっておらず、伊集院時代の遺構を最大限に活かしながら、細部の設えを変えていったと考えられる。



写真E 改修前の聚遠亭（對龍山莊所蔵 小川白楊撮影）

このように、庭園の北側は建築・庭ともに大改修を行い、周辺環境を取り入れた豪快かつ雄大な景色を作り上げ、南側は改修前の遺構を最大限に活かしながら新たに流れを作ることで、落ち着きと奥行のある景観が完成した。伊集院と植治、両者がそれぞれに作った景観の見事な融合により、一つの庭園のなかに、対照的な表情の庭が共存している。それが對龍山莊庭園の魅力の一つであり、現在まで受け継がれてきた。

## (2) 改修後と現在の比較

植治による改修から現在にいたるまでについては、庭園内はもちろんのこと、周辺環境も刻々と変化している。ここでは古写真と現在の写真を比較し改修後から現在まで、どのように庭園内および周辺環境が変化してきたのかを検証していく。庭園内を以下の3つのエリアに分類し、エリア毎に変化をたどる。（図3）

- ①對龍台から見える大池、大滝などの庭園内と周辺環境を含む庭園北側エリア
- ②聚遠亭周辺の露地空間や南側の流れを含む庭園南側エリア
- ③四阿や芝生広場、水車小屋裏の花菖蒲園を含む庭園東側エリア

## ①庭園北側エリア

①については大池周辺の樹木、南禅寺参道のマツ並木の変化が大きい。写真Gは昭和9年1月1日に市田弥一郎により発行された『對龍山莊』<sup>6)</sup>という写真集の中の一枚である。『對龍山莊』では、写真毎にタイトルがつけられ、建物内部や庭園内を撮影した33枚の写真が掲載されている。写真Gは「春雪晴れたる池邊より瑞龍山を



望む」と題された大池の西側から撮影した写真である。樹木が現在よりも一回り小さく、東山の稜線が見えている。大滝の横にはマツがあり、モミジとともに大滝周辺の景色を演出していた。現在このマツはないが、モミジが大きく生長し、大滝とモミジが美しい景色を作り上げている。一方で、水車小屋周辺のスギの生長により東山の借景は隠れてしまっている。

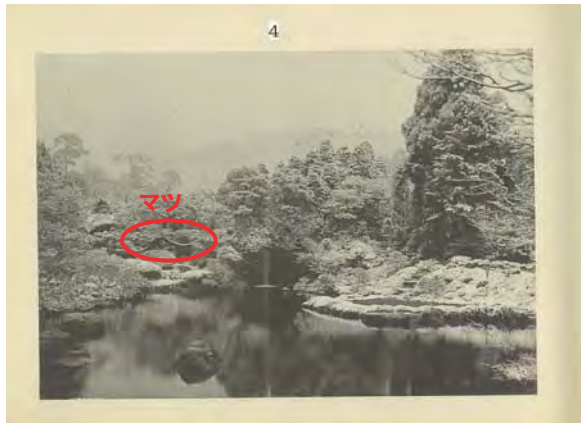


写真 G『對龍山莊』「春雪晴れたる池邊より瑞龍山を望む」昭和8年撮影



写真 H 写真 G と同位置から撮影  
平成 25 年 10 月撮影

写真 I は白楊撮影の大池南側から大池の掃除の様子を撮影した写真であるが、写真撮影当時は南禅寺参道のマツ並木が庭園内と一体となり奥行と迫力を出している。現在、参道のマツは当時よりも少なくなっているが、庭園内のマツが生長し現在もマツの景色が残されている。



写真 I 大池の掃除の様子  
(對龍山莊所蔵 小川白楊撮影)



写真 J 大池の掃除の様子  
平成 25 年 10 月撮影

## ②庭園南側エリア

②についてもまた樹木の生長により聚遠亭からの景観が変化している。写真 K は聚遠亭前から東を向いた写真である。タイトルには「聚遠亭より瑞龍山を望む」とあり、聚遠亭から瑞龍山が見え、庭園とつながっているかのような景色が広がっている。

現在では樹木の生長により瑞龍山を見ることはできない。深い庇によって凝縮された景色が現在の聚遠亭からの眺めの特徴であるが、写真 K と比較すると現在は広がりがないのが惜しまれる。また護岸の石組は作庭当初のままだが、下草により隠れてしまっている。流れの中には蛇籠が現在も残されており定期的に交換を行いながら伊集院時代からの景色が現在まで受け継がれている。



写真K『對龍山莊』 「聚遠亭から瑞龍山を望む」  
昭和8年撮影



写真L 写真Kと同位置から撮影  
平成25年10月撮影

### ③庭園東側エリア

エリア③は改修から現在にかけて植生や金地院との敷地境界が大きく変化している。

写真Mは前述の『對龍山莊』に掲載されている「櫻花爛漫」と題された写真だが、四阿の横では大きな桜が見事に咲いている。この桜は現在ない。さらに四阿の後方は現在よりも広いことがわかる。写真Nは「春の雪積みたる蔬菜園より金地院庫裏を望む」とあり水車小屋の裏、現在は花菖蒲園になっている場所が撮影されている。この写真からも当時は敷地が東側に広がったことがわかる。図1は昭和5年以前に作成された実測図であるが、四阿の後ろには竹林があり、芝生広場の東側には花壇が、北東の角には茅葺の小屋があり、敷地境界線も現在とは異なっている。この東側のエリアについては黒田の「新名園記(二)」にも「小亭を出で右に折る、こゝは梅林にして株々苔老し、中には二三星の如き花を着るもあり。其隣りは桃林にして、傍に花圃あり、花時の美觀想ふべ

し。」との記述があることから改修時に花壇を作り、梅、桃、桜を植栽したと考えられる。現在の芝生広場にはシダレザクラが3本とソメイヨシノが1本、白梅が1本植栽されているが、当時は芝生広場では花々が咲き誇り、美しい景色が楽しめたと思われる。この東側の敷地は、戦前は對龍山莊庭園として使用されていたが、戦後に金地院の敷地となった。



写真M『對龍山莊』 「櫻花爛漫」 昭和8年撮影



写真N『對龍山莊』 「春の雪積みたる蔬菜園より金地院庫裏を望む」 昭和8年撮影



図1「京都南禅寺市田邸実測図」に加筆<sup>7)</sup>



このように各エリアにおいて、改修後から現在まで樹木の生長や周辺環境の変化により、庭園内からの景色が変化していったことが分かる。

#### 4. 現在の對龍山莊における課題

作庭から百年以上経過した今日において、庭園内には様々な課題が発生している。平成25年3月の對龍山莊庭園の状態は、全体的にメリハリのない景色であった。コケと芝生の境界が曖昧でシダ類などの下草が繁茂し低木と混じり合っている状態であった。高木についても実生木が生長し、元からある庭園木の生長を阻害し景観の妨げになっていた。ここでは以上のような課題に対して今年行った改善策の紹介と今後、對龍山莊庭園を維持していく上で特に重要な課題を樹木・石組・水系の3つの項目に分けて考察する。

##### (1) 今年行った改善策

今年行った具体的な改善策は以下の通りである。

##### ①芝生の張り直し

對龍山莊庭園の特徴の一つである芝生広場が経年変化により芝生と苔が混在し、ぼやけた印象となっていた。そのため芝生の張り直しを行うこととなった。尼崎博正指導のもと、コケの生育が良好な場所についてはコケを残し、芝生とコケが美しく共生した景観を作り上げることができた。張り直し後も芝刈りを頻繁に行い施肥、目土を行うなど芝生の良好な生育のために日々管理を行っている。

##### ②小滝周辺の樹木・下草整理

大池北東側の小滝にはセキショウが繁茂しており、滝石組が見えない状態であった。本来の景色に戻すために文化財庭園保存技術者協議会正会員の指導のもとセキショウの間引きを行った。また對龍台下の小滝については、石積みから生えた実生木のアラカシやスギなどが大きく生長し、小滝を隠していたため前者と同様、文化財庭園保存技術者協議会正会員のものと剪定を行った。

##### ③下草類の整理

不必要な草については徹底的に除草を行い、シダなどの下草類についても必要最低限のみを残し整理を行った。その結果、本来の下草類が持つ美しさを最大限に引き出すことができた。

##### (2) 今後の課題と対応策の提案

##### ①樹木について

樹木については古木の衰弱や枯損がみられる。枯損している樹木については植替を、枯損する可能性のある樹木については後継木の植栽を行い景観の維持を図りたいと考えている。また樹勢回復や健全木の現状維持のために樹木医による診断を行い、近年猛威を振るっているマツ枯れ等の病害虫に対する予防や治療を行っていく。また、庭園にふさわしくない実生木、モミジやマツなど主要な庭園木の生長を阻害している樹木についても各指導員のもと対応していきたい。

##### ②石組について

流れや池の護岸については、経年劣化と植物の根の侵入により生じた護岸の隙間から水が護岸裏、園路に流れ込み、地盤が浸食されている。そのため庭園内には園路の陥没や飛石のがたつきが発生している。陥没やがたつきが発生する度に一時的な対応をしているが、今後さらに護岸の劣化と漏水が進行すると予想されるため、全体的な護岸の改修を行う必要がある。

##### ③水系について

配水管内に樹木の根の侵入や小石などの堆積により、水流が悪くなっている箇所については定期的に管内洗浄を行い水流の維持に努める。配水管が陶管の箇所については、破損する前に塩ビ管への交換が必要である。さらに近年は取水量の変動が著しく、今後は取水量が減少する恐れがあるため、庭園の景観維持に必要な取水量を確保するためには貯水槽の設置などの検討が必要になると考える。

#### 5. おわりに

古写真や文献などの整理によって、伊集院時代から現在にいたるまでの對龍山莊庭園の歴史的変遷と庭園内の植生や石組の経年変化、過去に発生した問題などを把握することができた。その上で對龍山莊庭園の現状を見直し、現状課題及び今後発生する可能性のある課題と対応策を見だしつつある。日々の維持管理を行いながら對龍山莊庭園と向き合い、今後も調査を継続することで、百年以上にわたり受け継がれてきた對龍山莊庭園の景観を今後の百年も維持していくための管理方針を文化財保護課や各指導員との協議のうえ適切に見定めていきたい。



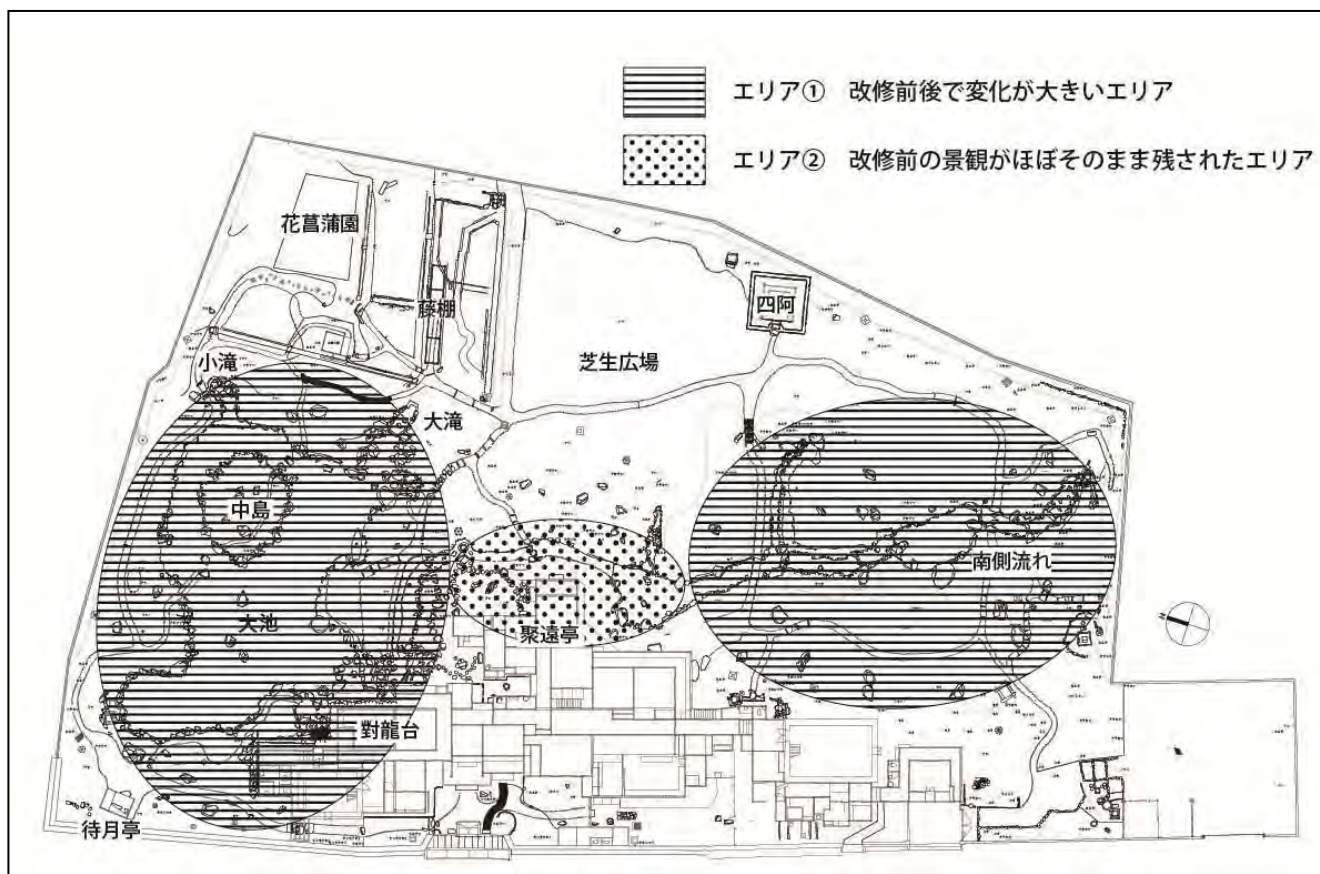


図2 改修前と改修後の比較エリア分け

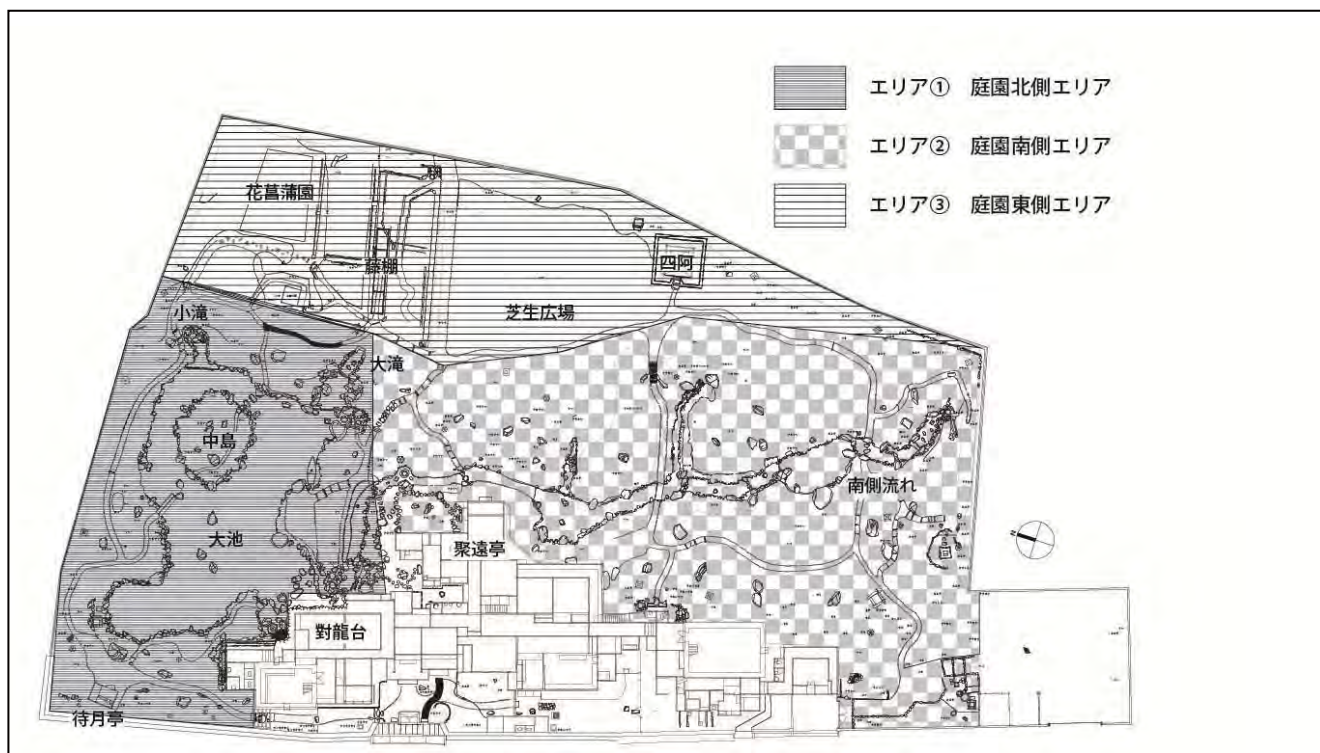


図3 改修後と現在の比較エリア分け



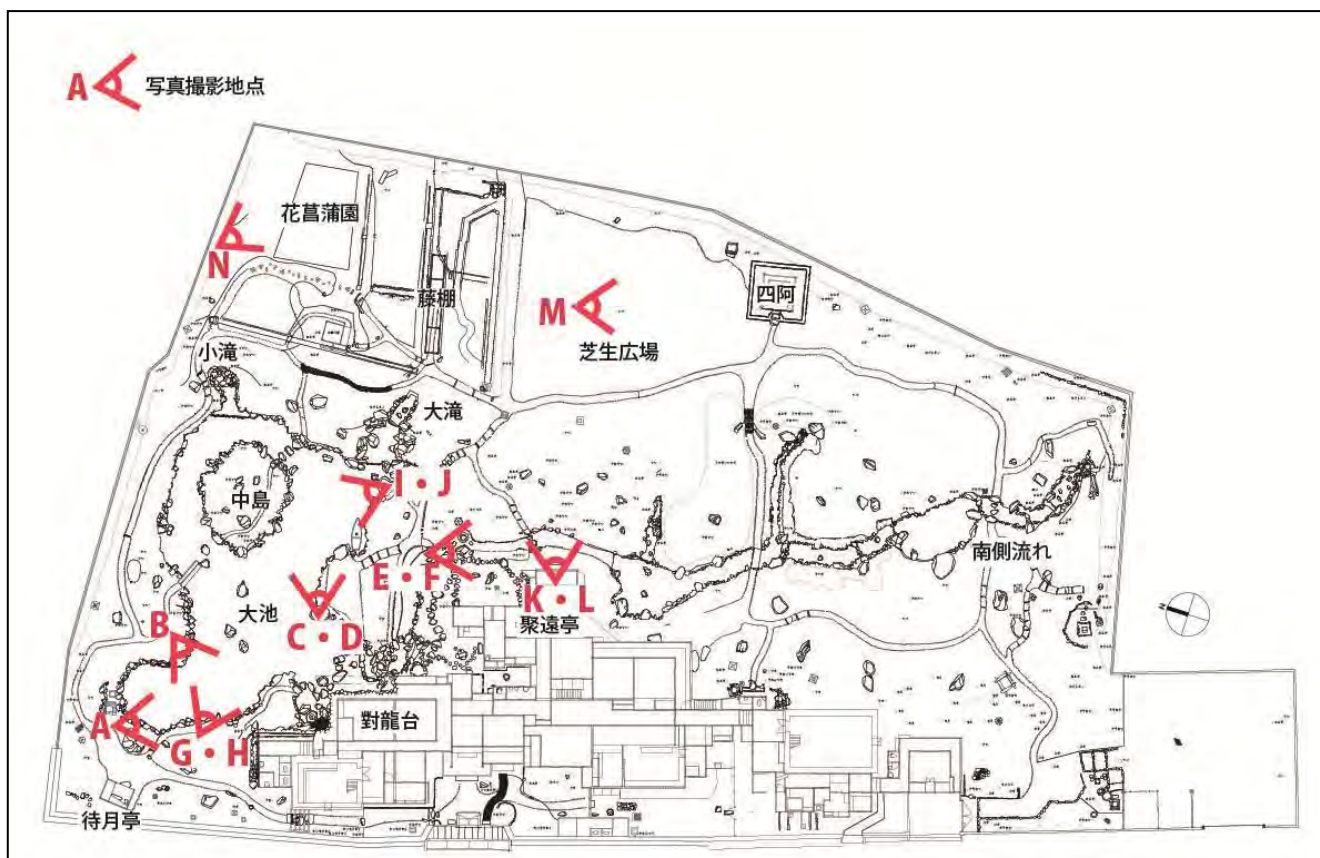


図4 写真撮影地点位置図



写真0 伊集院時代の蹲踞（對龍山荘内に保管）



写真P 現在の蹲踞

#### 参考・引用文献

- 1) 尼崎博正 『對龍山荘一植治と島藤の技一』  
株式会社淡光社 平成19年(2007)
- 2) 仲隆裕『植治の庭—小川治兵衛の世界』  
「對龍山荘庭園」株式会社淡光社 平成2年(1990)
- 3) 曾和治好 「對龍山荘庭園の水音と環境音」  
『平成11年度 日本造園学会研究発表論文集』
- 4) 黒田讓 『江湖快心録』  
山田芸艸堂 明治34年(1901) 32-33頁
- 5) 黒田讓 『日本 美術と工藝 第四號』「新名園記(二)」  
明治45年(1912) 60頁
- 6) 市田弥一郎 『對龍山荘』  
昭和9年(1934)
- 7) 「京都南禅寺市田邸実測図」に推定される現在の敷  
地境界を点線で加筆した